愛火・廣告

泉鏡花著

現今の脚本に於ける、無味乾燥と穉氣と生硬と不調和缺點通弊を打破して結構縱横、技巧自在、言々〳〵琴線を鳴らし句々世潮に觸る凡そ吾人の言語の如何に壯麗に、靈妙に、幽玄に、悽愴に、はた自然の音律に合うて立處に文たり歌たり得るものかを見よ。閑を貪りて筆を賊し、力及ばずして勞を盗む、所謂筋書なるものにあらず。著者多年思を潛め、秘して語らず、興來り、機の熟するを待ちたるもの、此の篇一たび出でゝ文壇の惰眠を覺し、讀者の睡魔を驅らん也。即是生粹の國詩純正なる日本劇、謹で問ふ、今の劇壇に演じ得べきや否やを知らず、彼の劇曲といふは、それ恁の如きものならずや。